

資料 2

つなぐ思い ―エルトゥールル号―

大型連休を目前に控えた4月のある日、私は和歌山県の南端の町、串本町を訪れていた。この地を旅行先にした理由は昨年の夏にあった。放浪旅行の大好きな私は、アルバイトで貯めたお金で思い切ってトルコ旅行に出かけた。しかし、旅の初日にリュックサックを置き忘れるという大失策をやってしまった。片言の英語しかしゃべれず、途方に暮れる私が日本人だと知ると、トルコの人たちは本当に親身になって助けてくれた。私がトルコの人たちに、

「どうして、そこまで親切にしてくれるの。」

と聞くと、決まって、

「トルコは、昔、日本に助けられた。日本はいい国。日本人もいい人たち。」

と、笑顔の返事が返ってきた。とにかく彼らの尽力もあって、無事にリュックサックが見つかり、旅を続けることができたが、私は、

(見ず知らずの外国人にどうしてここまで親切にしてくれるのか。日本とトルコの間にはどういう関係があるのだろうか。)

と、疑問に感じた。

また、その後の旅先で出会ったトルコの人たちも日本人の私に対して、とても親切だった。彼らの態度に、100年以上も前のトルコ軍艦エルトゥールル号の遭難事故がかかわっていたことを知ったのは、日本に帰国してからのことだ。エルトゥールル号の遭難事故を調べていくうちに、私は、実際にその地を訪ねてみたいという強い思いに駆られるようになった。

私が最初の目的地に選んだのは、串本町の西に位置する海中公園だ。ここには、海洋発掘調査によって引き上げられたエルトゥールル号と600名をこえる乗組員の遺品が特別展示されていた。

(生きて祖国に帰りたいかっただろう……)

やりきれない思いで海中公園をあとにした。

私が次に行くところは決まっていた。串本町大島、そこには悲劇の舞台となった榎野崎がある。

私は、この事故で亡くなったトルコ兵をまつる慰霊碑に向かった。この慰霊碑は、昭和12年(1937年)にトルコ政府によって建立(こんりゅう)された物だ。遭難直後に各地から集まった

義援金で建設された旧墓地の「土国(トルコ)軍艦遭難の碑」等もあった。慰霊碑の入口に「追悼歌」と書かれた小さな碑があった。私がそれに見入っていると、通りかかった女性が声をかけてきた。

「観光ですか。」

「はい、トルコ旅行をきっかけにエルトゥールル号のことを知ったので……。きれいなところですね。」

「ええ、いいところでしょう。今でも年に一度、小学生たちがここを掃除して、その歌を歌ってくれるんですよ。」

「いつごろからそういう取り組みをしているのですか。」

「掃除は戦前からだと聞いています。追悼歌は、私が小学4年生の時からだから、昭和35年(1960年)からかしら。」

それを聞いて、私はトルコで出会った人たちの言葉や笑顔が鮮やかによみがえってくるのを感じた。この地に生きる人たちの思いが伝わるような気がした。子どもたちが歌うという追悼歌の最後は、こんな言葉で締めくくられていた。

	(意味)
榎野なる熊野の浦へは	榎野という熊野の海辺で
老い老いし漁人(すなどりひと)は	歳老いた漁師たちが
指さして 声をひそめる	海を指さしてひそひそと話をしている
風くろく 暴れ(おれ)の夜なりし	真っ黒な 暴風で荒れた夜だった
ああ われら とわに語らめ	私たちはこの事故を永遠に語り継いでいこう

私は慰霊碑を後にし、トルコ将兵たちが最初に救いを求めた灯台の官舎に向かったのびる遊歩道を、ゆっくりと歩いていった。道の両脇には咲き終えた水仙が無数に広がり、風に揺れていた。灯台を回り込むようにして榎野崎の突端に立った時、私の前にはどこまでも広がる大海原と青い空があった。